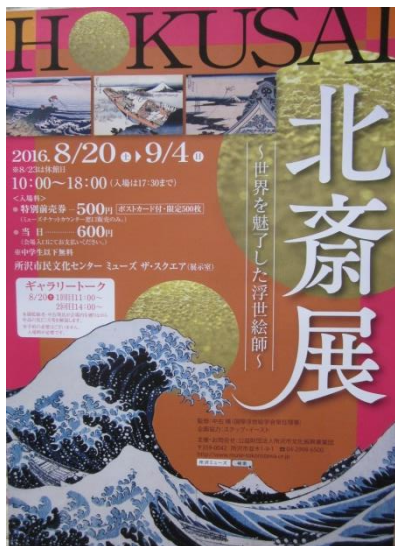


## 北斎展 ～世界を魅了した浮世絵師～

所沢市民文化センター ミューズ ザ・スクエア 2016. 08. 20～09. 04

「葛飾北斎」(1760～1849) は、「広重」「歌麿」「写楽」などと並び、江戸時代後期に活躍した浮世絵の巨匠で、70年の長きにわたり絵師として浮世絵に限らず草双紙や読本などの挿絵、絵入り狂歌本、摺物、絵手本、肉筆画など膨大な数の作品を制作した。特に、下記の「赤富士」「浪富士」などの作品は、現在でも絶対的な人気を博しておりその地位は揺らぐことはない。

画伯は海外でも非常に知名度が高くて、輸出用陶器の包み紙に使用された絵本の《北斎漫画》に衝撃を受けたフランス人の陶板画家や美術家仲間から徐々に、「浮世絵＝北斎」という評価が定着して、これがきっかけに「ジャポニズム・ブーム」が巻き起こり、「北斎」の名は一躍ヨーロッパで大評判になった。

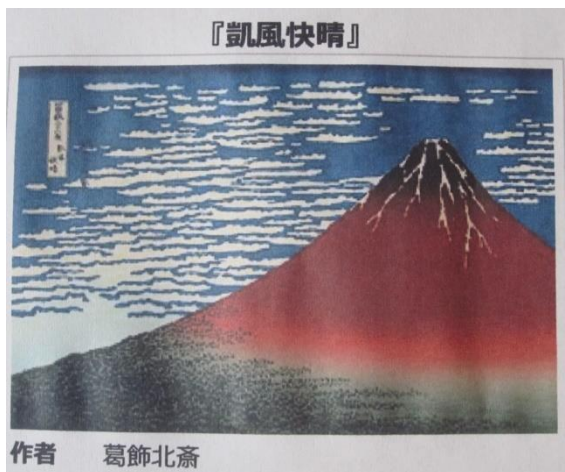


ふがく なみうら  
《富嶽三十六景 神奈川沖 浪裏》1831年頃

全46図の「富嶽三十六シリーズ」の一図で、小さく遠景に見える富士山と対比させた迫力ある巨大な浪の動きが印象的で画伯の名作である。

北斎の作品は、大胆な構図に巧みな線と象徴的な色使いで仕上げがされており、独創的な画風は多くの絵師たちに大きな影響を与えたとされている。

《凱風快晴》1831～33年 多色刷り木版画



名所絵（浮世絵風景画）《富嶽三十六景》全36図の一枚で、《神奈川沖浪裏》と共に、シリーズの代表作である。

本作は通称「赤富士」とされ、夏の早朝に日を受けた富士山の山肌が赤みを帯びた一瞬を大きく正面から描いたもので、画面下には樹海、空にはいわし雲、山頂には雪渓が描かれている。

「凱風」とは、「詩経」にある言葉で、夏に吹く柔らかな南風を意味する。